

國學院大學學術情報リポジトリ

資料紹介 「ママ、僕ピアノ嫌い!」 室井摩耶子著芸術
現代選書・芸術現代社(1975)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高山, 真琴 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001193

資料紹介

高山 真琴

「ママ、僕ピアノ嫌い！」 室井摩耶子著 芸術現代選書・芸術現代社（1975）

「ピアノなんて大きい！」とアポロ先生に弟子入りして早々、レッスンで言い放った少年ピンのこの一言から本書は始まる。

ピンは小学4年生。ママのピアノに興味を示し、2年前からよるこんで伯母の下でピアノを始めたが、今、新たにアポロ先生のもとに弟子入りしたピンは、レッスンでピアノに向かうと「まるで夜をむかえたねむの木のようにすべてをとぎしてしまう」。アポロ先生が「ね、ピン、ピアノ好き？」と訊ねたところ、冒頭の言葉を言ってのけたのであった。

一方アポロ先生は学校を卒業して5年。入門したての新弟子ピンの、レッスンの間中黙して語らず、終わればさすごとと帰っていく姿に心を痛めている。しかし「音楽のことにかけてはひたすら夢中」、大柄で颯爽としたボーイッシュな美しさを持つことから、アポロ（音楽の神）という女性らしからぬ名前と呼ばれているピアノの先生である。

本書では、11人の作曲家のピアノ作品16曲を、このアポロ先生とピンが音楽として作り上げていく過程が克明、詳細に描かれている。その場面を読む読者は、アポロ先生の言葉で楽譜が音となり、あたかもそのレッスン室でピアノを聴いているかのように、音を頭の中で再現できるであろう。

ここで、ピアノに対する興味が再び戻りかけているピンへの課題、F.クーラウのソナチネOp.55Nr.1 第1楽章冒頭のテーマをアポロ先生がどのようにピンにレッスンしているかを示してみる。

「それではまず右の手だけ、そのテーマの出はじめをひいてみましょう。最初の四分音符、付点がついて長くなっているでしょ。2拍目に動いて行きたいのを待っているのよ。ちょうど運動会の100メートル・レースみたいに、ヨーイって次のドンをまっているのね。そしてほんとうは最初の2点cは2拍まって、2点eに行ってもよいのだけど、その間に1点gが入るの。そうすると一度音が低くなって2点eに行くから2点eがきれいにきこえるでしょ。（アポロ先生は、1点gが入る場合と、入らない場合をひきました。なるほど入らないと2点eからの4つの八分音符がずっと間が抜けてきこえます。）そして1点hの音にその流れの山がくるの。そうすると1小節が一つの波になるでしょう。」（本書P.35-36）〔譜例1参照〕

〔譜例1〕

この部分は、曲の冒頭8小節におよぶ第1テーマの最初の1小節の記述である。アポロ先生は一つ一つの音の長さや高さを確認しながら、それらの音が隣接する音につながっていくその現象をピアノで表わし、そこに音があるべき必然性をピンに体得させていくのである。

「音が二つ並べばそこに相互関係が成立し、たとえ1小節に1つの音符しかなくても、拍子のリズムはその音の中に流れています。」と室井は記している。その音と音との連なりを音楽として理解しようとするならば、リズム、拍子、和声、フレーズといった音楽を構成する要素について熟知することが必要であり、それらはあくまでも音楽の中で音 - ひびきを中心に理解されるべきものであると室井は言及する。言語を理解するには、その国の国語を理解する必要があるのと同じように、音によって表現された音楽という言語には、音楽の単語、音楽の構成、そして音楽の文体といった音楽を読むための基礎となる「音楽語」を知らなければ、その本体へ近づきようもない。

室井はこの「音楽語」をヨーロッパ修行時代に体得し、後のピアニストとしての、また教育者としての自己を確立して行くのであるが、昭和46年に出版された室井著「ピアニストへの道」に、ピアニストとしての室井摩耶子をはぐくみ育てたロロフ教授のレッスンについて、次のような記述がある。

「けっしてテオリーめいたことは口になさらず、いかなる場合も事実を一つずつ具体的に「その音はもう少し小さく…少し良くなったがもう少し小さく。いやこんどは小さすぎた。」という風に事実即して、音楽を作る上になくはならない基礎的な音感を徹底的に叩き込んで下さった。それは一見何でもないことのようにみえたが、この積みかさねが、後後、私がピアニストとして仕事を始めるようになってからの、確固としたスプリング・ボードとなったのである。」

このようにして「音楽語」を体得していった室井は、子どもの音楽教育は、まず「良い耳を養うことから」、そして教師自身が「音楽語」を十分理解し、子どもに音として提示できて初めて子どもに音楽を教えることができると明言する。

「音をきく耳を育てるのですよ。汚い音や、正しくないリズム、間違ったフレーズをきくにたえない耳、幻想にあふれた音楽、美しい音楽をキャッチするのに敏感な耳。それらは音楽をするために第一に育てられなければなりません。お料理だって良い味を作るにはまず舌の訓練が必要でしょう。これはそんなに大事なことなのに、案外深い注意がむけられていないんですよ。」と、アポロ先生の友人である大先輩氏は語る。(本書P.23)

ヨーロッパと日本を行き来しつつ、ピアニストとしても教育者としても円熟の境地に入り始めた昭和50年に室井はこの「ママ、僕ピアノ嫌い！」を上梓した。そのあとがきで「今、本となって自分の足で歩き出そうとしているこのピンの物語が、少しでも日本の音楽の世界に役立つことがあったらと思う。それは文字通り祈りにも似た気持ちなのである。」と記している。《子どものピアノ教育とはほんとうに難しい》、《何のためにピアノを弾くの》、《先生であることって何と大変なことだろう》と、アポロ先生とピンとのレッスンの合間を見て、室井は問いかける。初版か

ら35年を経た今、室井の問いは今もなお日本の音楽教育への警鐘として響く。音楽とは何か、教育者であるということはどういうことなのか？

アポロ先生と友人達の会話の中には、音楽を教えることについて語っているにもかかわらず、教育者のあり方や、子ども理解についての至言ともいべき言葉がいくつもある。

「子どもが学校でお友達と野球をして面白かったり、試合で勝ったりしたら、そこにはもうピアノを浚うためにエネルギーと時間をわけて取っておこうなどという思考がおこる訳ありませんでしょう。－中略－もしそういう事をカットするとそれはやっぱり子どものその年令の生活は豊かに本格的に行われたというには、何か足りないといえるのじゃないかと思います。8才の時その生活を確立しておかなければ、9才の人間的な経験をしっかりその上につむことは出来ません。音楽家になるにしろならないにしろ、とにかく後で一個の人格として立派に成熟してくれるのでなければ困ります。」(本書P.134-135)

「大人が楽しいとかわかりやすいとか簡単に考えるからいけないんだわ。子どもに、ほら楽しいでしょっておしつけるなんてとんでもないこと－ということなんだわ。」(本書P.74)

「“子ども位になら教えられます”なんてやすやすと言われるけれど、子どもに教えるのには非常に幅広い知識と音楽の見識が必要でしょう。ひくことだけでなく音楽全般について教えないければならない時も随分出てきますもの。」(本書P.226)

「だから僕はつくづく思いますね。先生だけに専念している人も、何も演奏家的な勉強じゃなくてもいつも音楽に対する研究、つまり心の動きをもっていないわけにはいけないのだから。」(本書P.228)

「私はあのサーカスの鞭をもったトレーナーにはなりたくありませんわ。人間の子どもの伸びて行くのに手をかしているんですもの。」(本書P.228)

「だから先生として大切なことは、将来ピアノを職業とするかしないかは別として、音楽の心だけは、勿論それを表現するテクニックと一緒にして、その子の生活の中に後々までもしっかり残るようなものを与えることといえるのじゃないかな。「その子自身のもの」にしておいてやることです。そうしてあとで能力や適正があったら自分で途を選ぶでしょう。」(本書P.229)

「子どもが将来、自分のファンタジーを展開しようとするとき、しっかりとびたてる踏台を作ってやってください。」(本書P.21)

「先生は生徒に翼を与えるのよ。彼がそれで力強くどこまでもとんで行けるために。」(本書P.230)

本書に掲載された16曲のピアノ曲の見事なアナリーゼ（分析）と共に、これらの言葉は、ピアニストとして、また教育者としての実践の裏づけと、音楽と次の世代への愛情があって、初めて語れるものではなからうか。

「音楽に接する方法、音楽語のよみ方、作曲家と話す方法の数々、そういった音楽の原則を教えることは出来ますわ。だけどその子の音楽は、その子がそれらの方法を通して自分で作らなけ

ればならないものですわ。」(本書P.229)

子どもの情操を育むとともに、生涯を通して音楽を楽しめる基盤を子どもの中に作ることを目標に、小学校では音楽が教科として置かれている。音楽的体験を通して、どのように子どもが変わっていくかは、アポロ先生のレッスンを受けるようになったピンの変容が、一つの例として示されよう。本書がフィクションであるか、ノンフィクションであるか、と問われれば、「音楽は私のムッターシュプラッヘ(母国語)」と言い、自身の思考やその表現を、最も自然に的確に行うための媒体と位置づける音楽家、室井摩耶子の経験から生まれ出たものと答えたい。

掲載曲一覧

作曲家	掲載章	曲名
ル・クーペ	第2章	ピアノのアルファベット Op.17 K へ長調
クーラウ	第3章	ソナチネ ハ長調 Op.55 Nr.1 第1楽章 (ソナチネアルバム第1巻第4番)
ベートーヴェン	第4章	2つのソナチネ 第2番 へ長調 全2楽章
チェルニー	第5章	30番練習曲集 第6番 ハ長調
モーツァルト	第6章	ソナタ へ長調 KV332 第1楽章
クーラウ	第7章	ソナチネ ト長調 Op.88Nr.2 第1楽章 (ソナチネアルバム第2巻第5番)
バッハ	第8章	インヴェンション 第4番 ニ短調
バッハ	第9章	フランス組曲 第5番
シューマン	第10章	ユーゲントアルバム Op.68 第14番「小さな習作」ト長調
シューマン	第11章	ユーゲントアルバム Op.68 第24番「収穫の歌」イ長調
モーツァルト	第13章	ソナタ 変ロ長調 KV570 第1楽章
ベートーヴェン	第14章	ソナタ ハ短調 Op.10 Nr.1 第1楽章
バッハ	第15章	シンフォニア 第9番 へ短調
バルトーク	第16章	マイクロコスモス 第6巻「蠅の日記帳から」
イベール	第17節	物語 第8番「ガラスの鳥籠」ト長調
ショパン	第18章	華麗なる大円舞曲 変ホ長調 Op.18

参考資料

室井摩耶子の著作・CD

- * ピアニストへの道 音楽之友社 (1971)
- * ひびきを求めて～ピアニストからのメッセージ～ (音楽選書) 音楽之友社 (1985)
- * チェルニーってつまらないの? 音楽之友社 (2002)
- * 室井摩耶子シューベルトを弾く アダムエース (1997)
- * 室井摩耶子《月光の曲》ライブ ゼール音楽事務所 (2006)
- * 室井摩耶子《モーツァルト生誕250周年》ライブ ゼール音楽事務所 (2006)
- * 室井摩耶子 モーツァルト：魂の《アダージョ》 ゼール音楽事務所 (2007)
- * 壮大な音の殿堂“バッハの神髄” 室井摩耶子 ゼール音楽事務所 (2008)
- * 室井摩耶子《米寿記念コンサートライブ》 ゼール音楽事務所 (2009)

(たかやまこと・國學院大學人間開発学部初等教育学科准教授)